日本ＳＯＤ研究会報

発行元 日本ＳＯＤ研究会 宮城
住　所 〒158-0094
東京都世田谷区
玉川 1-15-2 Ｂ棟 2802
TEL. 03-5787-3498
協力：株式会社丹羽メディカル研究所
http://www.niwa-medical.com

特集 愛飲者インタビュー

「私の命はSODです」と言い切る電子療法を今も行う現役治療師

埼玉県の新井利治さん（97歳）

電子療法、というとマッサージや指圧、鍼灸院などで施術が行われている遠赤外線や高周波などを使った治療の一種。今回登場いただいた新井さんはその療法で40年以上も施術を続けてこられ、今も全国から新井さんの施術を受けに訪ねていらっしゃる方がいるとか。御年実に97歳の現役です。もちろんこのコーナーでは断トツの最年長。

伺ったのは埼玉県の比企郡小川町という群馬県にほど近いのどかな町でした。

こちらで代々畳屋さんを営んでいらしたという新井家。その傍ら、昔から好奇心旺盛、人の手助けをすることが大好きだったという新井さん。最初のきっかけは易学との出会いだったそうです。もともと人とお話しするのが好きで、人の話を聞いているうちに、人にはそれぞれ運や定めがあると感じ、易学に興味を持ち、独自で勉強をされたとか。

「易学をもとにいろんな方の人生相談にのっていました。そうすると、健康のことを相談される方が多く、何とか力になりたいと思うようになったんです」

そんなときに電子治療器のことを知り、電子治療と易学との共通項に縁を感じたそうです。

「気の流れという部分で易学も似ているんです。血液は12経路を一日で巡るのですが、この流れが活発だとエネルギーに満ちるわけです。どこかが滞れば、気の流れも滞り、心身ともに不調になる。それを電子療法で補うことができるんですね。心電計や脳波計と同様にこれらの機器の通電量で全身の状態が検査できるんです。この治療機器は日赤病院を始め、多くの病院でも使われています」

部屋の周囲をぐるりと取り囲むようにして様々な機器が置かれ、離れの一室にも訪ねていらした方が自由に電子治療器を使えるようにされていました。

その傍らでお茶を振る舞ってくれたり、ちょっと耳が遠くなっている新井さんの通訳代わりをしてくださっているのが92歳になられ

る奥様でした。張りのある肌艶、しゃんとした立ち居振る舞いからして、どう見ても70代にしか見えませんでした。新井さんの97歳もビックリですが、このご夫婦の超人ぶりはどうしてなのか、お話を伺ってみました。するといきなり

「私の命はＳＯＤです」

ときっぱり。

「もう30年くらい、毎日欠かさず飲んでいます。私はいろんな人の相談にのることが多いから、いろいろ勉強しているんです。健康雑誌や新聞記事などから情報を収集して、それを自分でも試してきたんです。試していいものだけを人にも勧めているんです。そのなかでいちばんがＳＯＤだった。私がＳＯＤを実践してからこれまで風邪ひとつひいたことない。活性酸素を減らすにはこれがいちばんです。だからこの40年間、一切、薬というものを飲んでいません」

活性酸素のことも良くご存じで、驚いていると、新井さんは何冊かの情報ノートを見せてくれました。そこには、これまで収集してきた情報がびっしりと手書きでつづられていました。（写真1）情報ノートだとおっしゃるので、てっきり雑誌や新聞の切り抜きを収集されているのかと思いきや、そうではなく要点や気になった文面を図解入りで自分流に書き記していたのです。達筆な文字や図にも驚きました。そんなノートが何十冊もあるのです。

「こうやってまとめていると新しい発見や勉強ができて楽しいんです」

いやはや、脳の中身は10代～20代の柔らかさかもしれません。

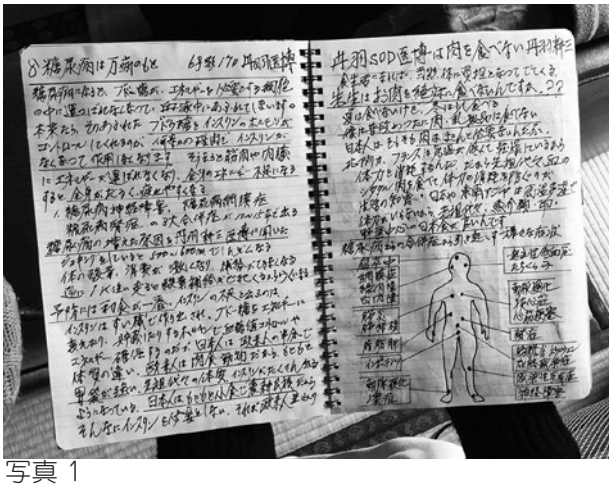

写真 1

新井さんの三種の神器は食事、ＳＯＤ、ウオーキング

ご夫妻の健康の秘訣は食事にもありました。

「我が家では電気釜がふたつあって、夫婦それぞれが自分の分を炊くんです」

なんだか意味不明の我が家流。

「ふたりともトシですから、互いになにがあっても自分のことは自分でできるようにしているのと、好みの違いですね」

奥様は白米がお好きで、新井さんは自前の雑穀米。内訳は、干しエビ、小魚、寒天、ひじき、乾燥シジミ、くるみ、青粉（海藻）などを細かく粉砕してお米に投入。さらに缶詰の牡蠣を混ぜて炊飯。この特製ごはんに、いま健康食品として大注目の鯖缶をおかずにしています。丹羽先生がこのメニューをご覧になったら、満点をつけるのではないでしょうか。これにＳＯＤとルイボスティー、グリーンスムージーを毎日飲み、５０００歩のウオーキングも欠かしません。

「あと、体温を３６．８度に保つよう、毎日短波とマイクロ波を使って血流を促し、身体を温めるようにしています」

新井さんの施術を受けに来る人達のほとんどが60歳代から70歳代。みなさん身体に何らかの疾患を抱えていらっしゃるとか。

「自分より若い人たちがばかり。今の時代、ストレスや環境汚染の影響が多いのでしょうね。うちはみなさんが電子治療器は好きなだけ何時間使っていただいても構わない。治療器を体験された方たちが少しでも楽になって帰ってもらえればいいんです」

人の役に立つこと、そのために勉強することが楽しくて仕方ないと笑顔でおっしゃる新井さん。ここまできたら日本人最年長目指してあと20年はお元気で。あながち間違いではないはずです。

SOD愛飲者
インタビュー

アトピーにマグニー石は絶対の信頼。

埼玉県で薬局を営む明石さん（仮名）

昨年（２０１８年）厚生労働省の発表によると、国内の薬局数は過去最高の約６万件にのぼるそうです。ドラッグストアのような雑貨まで扱う薬局から、一般薬ではない調剤薬局まで、薬剤師さん常駐の薬局といわれる店舗の数は、年々増え続けているのです。カテゴリーでいうと、コンビニに次ぐ数なのかもしれません。いかに多くの人が薬を買い求めているかがわかります。

そんななか、今回取材させていただいた明石さんは、他店とはひと味違います。

「そうなんです、薬局がすごく増えて、どこかで特色を出していかないといけない。ですからうちは漢方と健康食品などに特化しているんです」

もともと健康食品などには興味があり、あれこれ試してきたという明石さん。おのずと漢方にも興味を持つようになりました。

「かなり勉強しました。漢方に使われる生薬の名称や効能、人の身体の巡りなど、知れば知るほど奥が深く、うまく組み合わせることができれば人間本来の力を補う素晴らしい薬だと思ったんです。ところが、市販の漢方、よく私たちが目にしたり、聞いたりする漢方薬は、まったく効かないんです。もう、泣きたくなるほど効かない。期待が大きかっただけに落胆も大きかったですね。こんなのだったら、そこらのビタミン剤のほうがよほど効果があるんじゃないかと思いました」

そんな中で出会ったのが、ＳＯＤと剤盛堂という和歌山の漢方薬の会社だったといいます。

「どちらもすごく効果があったんです。ＳＯＤはアトピー、剤盛堂は花粉症の漢方などにものすごく効いたんです」

ＳＯＤを知ったきっかけは、お客さんからだったとか。選りすぐった健康食品を扱っている薬局として近所でも評判だったおかげで、お客さんからの情報もたくさん集まり、相乗効果があったといいます。

「ＳＯＤとの出会いは、もう２０年くらい前なんですよ。当時、歯医者の先生から、ＳＯＤありますかと言われたんです。なんでも先生のお嬢さんがアトピー性皮膚炎でステロイドを使っていたら大変なことになった。それで丹羽先生の診療を受けたら、きれいに治ったというのです。その時に、ＳＯＤを続けるようにいわれたので、私のところに仕入れてほしいといらしたんです」

そこで持ち前の好奇心と勉強熱心さでＳＯＤや丹羽先生についていろいろ調べたそうです。

「これはいい、と確信しました。理論も活性酸素のことも、ステロイドの副作用のことも、抗がん剤のことも、すべてがストンと収まるように納得しました」

アトピー性皮膚炎だけでなく、現代人の健康維持には必要不可欠のものだと確信した明石さん。ご自身もＳＯＤを飲むようになりました。そんなとき奥様が腎臓を悪くされ、塩分やタンパク質の摂取制限を余儀なくされ、さらにステロイド治療しなければいけなくなりました。

「有名な病院をいくつか渡り歩きましたが、どこもいっしょ。ステロイドや免疫抑制剤治療しか薬がない。こんな薬を飲み続けたら、他の臓器もダメにしてしまうと思ったんです。症状を抑えるだけで、治療ではないと。目の前が真っ暗になりましたね。それでふと、丹羽先生に相談したらどうだろうと思いついたんです。もう西洋治療

では限界がありましたから」

明石さんはすぐに大宮にあった丹羽先生の診療所を訪ねました。

「そうしたら先生が、この病気にはサンドバスがいちばん効果的。しかし、土佐清水病院にしか設備がない。本当に治したいなら、土佐清水病院にいらっしゃいといわれました」

サンドバス（※注1参照）、これが今回のキーワードでした。アトピー性皮膚炎で入院した人たちや、がんの患者さんたち、土佐清水に入院された患者さんは必ず体験する丹羽療法のオリジナルです。

宮崎県の天照石と新潟県のマグニー石を細かく粉砕し、直径２ミリほどの球形の石にし、それらを浴槽に敷き詰め適温に温めて、そこに入浴するように入ります。そうすると、体内の不純物や有害物質などが汗と一緒に排出されると言います。

土佐清水病院で、丹羽先生の処方する生薬、ＳＯＤを飲み、サンドバスに入る。これを１か月続けたところ、奥様の症状は見る見る回復されたそうです。

「すごい先生ですね。大病院ではこのままステロイド投与を続け、いずれ人工透析をすることになると言われていたのに、治してくれたんですから」

以来、明石さんの薬局ではサンドバスを仕入れるようになりました。もちろん、おうちの入浴にも欠かせません。

「そうなんです。家庭でもお風呂に入れると体の芯から温まりますよ。肌の調子もいいです。うちは１００円均一ショップで売っている洗濯ネットに１kgずつ入れて、全部で10袋入れて入浴しています。やはりアトピーの方にお勧めしたいので、使ってみたい、使ってもらいたいという方がいらっしゃれば、洗濯ネットに入れたものを貸出しているんです。わりと高価なものですから、すぐに買いますというわけにはいかないですから」

こんな明石さんの良心的な対応に、今では全国から相談や購入が入るとか。マグニー石の愛用者の声は、会報でも初めてのことで、とても参考になりました。ありがとうございます。

※注1　サンドバス（マグニー石）

「最近流行りの色々健康に有益な石や砂、トルマリンやセラミックと云われるものが 薬石として健康産業の人々を通して販売されていますが、これは皆誤りではありません。ただ、その石の放射するエネルギーが強いか弱いかの差によって優劣が決まるのです。自然回帰の医療を標榜して20年以上になる私（丹羽）が、その丹羽療法の開発の歴史の最後に 到達し、得られた最高のものが、何十億年もの間、地球のマグマが噴出して出来た、この 北陸・五頭山系の地底（鉱底）に眠る〝マグニー石〟であり、また、太古の時代、天体から 落下して来た隕石である天照石（天降石、SGES、super growth ray emitting energy）です。このマグニー石や天照石は、最近注目されて来た、〝水の浄化〟や〝健康増進〟に 用いられている種々の薬石、岩石類（トルマリン石等を含む）やセラミック類とは、比較にならない程強力なパワーを有する、電磁波、育成光線（成長エネルギー）を放射します」（土佐清水病院ＨＰより）

○効能：正常細胞活性化　癌細胞抑制　体内の有害、汚染物質を排泄　血流の改善・促進　バリアー破壊を修復　保湿機能を向上

○効果的な疾患：アスベスト（石綿）中皮腫　肺線維症　肝炎　腎炎　癌　膠原病　環境汚染の毒物（Ｃ−2、Ｈｇ、As、Pb、Ｃｄなど）の体外への排泄（水俣病、ダイオキシン中毒など）心筋梗塞　脳卒中　関節炎　白内障　冷え性　血流障害（バージャー氏病、脱疽、静脈瘤）肩凝り　アトピー性皮膚炎に著効

SOD愛飲者インタビュー

丹羽療法で白血病から生還 兄も末期の肝臓がんから生還

東京都にお住まいの辻田裕司さん（83歳）

この愛飲者インタビュー３度目の登場をお願いしたのは、テニスのシニア（正確にはベテランの部）元日本チャンピオンである辻田さんです。

初めてのインタビューは15年ほど前でした。テニスの年代別（60歳代）日本チャンピオンという華々しい経歴を持ち、会社経営のかたわら、鍼灸治療の資格をとり、治療師としても活躍されていた辻田さん。テニスだけでなくフルマラソンにも挑戦する、絵に描いたようなスーパーマンぶりでした。

そんな辻田さんを最初に襲った病が膠原病でした。肩からひじ、膝の関節に痛みが走り、テニスどころか歩くこともままならない痛みにさいなまれました。難病指定されている膠原病には西洋医療では未だ確かな治療法はなく、ステロイドと痛み止めでその場をしのぐことしか出来ません。鍼灸治療師である辻田さんは、西洋治療では治らないことを冷静にとらえ、自力で丹羽先生の治療にたどりつきました。そうして丹羽先生の生薬とＳＯＤで膠原病を克服し、１年後にはテニスプレイヤーとして復帰を果たしました。

次に病魔が襲ったのは膠原病発症から10年後。79歳のときでした。病名は急性白血病。そう、今年に入って水泳の池江璃花子選手が公表し日本中に衝撃を与えた病気です。血液のがんといわれ、若年ではアスリートに罹患率が高いといいます。アスリートが心肺機能を向上させるために行うトレーニングなどが、活性酸素を大量に発生させるからだそうです。辻田さんもアスリート。さらにテニスプレイヤーは炎天下で紫外線を浴びる機会が圧倒的に多いのです。紫外線を浴びすぎると体内で活性酸素が異常に増え、あらゆる病気の元になるそうです。

「白血病のときは病院で余命数か月と宣告され、葬式の準備まで勧められましたから、丹羽先生のところに行かなかったら間違いなく私はここにはいませんでした。先生の治療が１か月、いや一週間遅れていたら、アウトだったかもしれません。現に同じ頃に白血病になった同年代のテニス仲間は発症から半年で亡くなりましたから」

土佐清水病院に緊急入院して１か月。生薬と食事療法、マグニー石のサンドバスなど徹底した丹羽療法で奇跡の生還をしました。自身、鍼灸治療師の資格を持ち、さまざまな患者さんの治療を行ってきた経験に丹羽療法が加わり、83歳の現在も毎日のようにコートに立っています。

余命１年の肝臓がん 抗がん剤治療で衰弱

さて、今回、辻田さんにインタビューをお願いしたのは、実は、辻田さんのお兄様のことでした。私たち取材のスタッフが２０１６年の春、丹羽先生のインタビューで新横浜の診療所を訪ねたところ、待合室で偶然に辻田さんにお会いしました。この日は５歳年上のお兄様の付きそいでいらしてました。その時のお兄様の病状を記事の抜粋で紹介します。（会報１８４号より）

辻田さんのお兄様は、現在85歳（２０１６年当時）。学生時代は野球に打ち込まれたとか。弟さんはテニスとまさにスポーツ一家でした。体力には自信があったそうです。それが去年、肝臓に異変が見つかり、肝臓がんと診断されました。肝臓は、体内の有害物質の解毒や排出をする重要な臓器といわれています。と同時に、物言わぬ

臓器と言われるくらい、自覚症状がわかりにくい臓器だとか。ですから、異常が見つかった時にはかなり進行しているそうです。

お兄様の場合も２０１５年の夏ごろに肝臓がんが発覚し、芳しくない状態だと言われたそうです。先生のニュアンスでは余命１年くらいだと。そして当たり前のように抗がん剤治療を勧められたそうです。85歳での手術は無理があります。となると残された治療法はおのずと抗がん剤治療になるのでしょう。抗がん剤治療は、丹羽先生を始め、これまで幾多の世界中の学者の方々が、百害あって一利なしとおっしゃっています。それでも目の前の医者に勧められれば、万に一つ、効果が期待できるかもしれないと思うとか。このときお兄様が勧められたのが、カテーテル手術療法というものでした。これは、お腹に小さな穴をあけ、そこからカテーテルという細い管を通し、患部に直接抗がん剤を注入する治療法です。これまでの抗がん剤投与は、注射か服用などで全身に様々な影響を与えていましたが、カテーテル投与なら患部だけに、しかも直接、抗がん剤が届き、より効果的で身体への負担が少ないと言われています。

しかし、この治療法を用いても、お兄様の様態は一向に良くならないどころか、余計にだるさが増したと言います。がん細胞が増加していることを示すマーカーも悪く、ＣＴでの画像診断でも縮小効果はあまり見られなかったとか。

そこで弟さんの出番でした。がん、と言われたときから、１日に９包ずつのＳＯＤの服用を勧めました。さらに、丹羽療法を受けるように勧めたそうです。自身が２度も丹羽先生に命を救われた実体験がありましたから、なおさらでした。

そうして丹羽先生の診療所にいらした日に私たちはお会いしたのです。

診察にも立ち会わせていただきました。丹羽先生は、カテーテルで抗がん剤を入れても、抗がん剤はがん細胞だけにあたるわけではなく、正常な細胞にもあたってしまう。がんも死ぬが、肝臓の正常な細胞も死んでしまう。だから身体がさらにだるく感じてしまうのだと言いました。がんもたいして縮小していない。医者からはもう一度カテーテル療法を勧められたとか。もちろん丹羽先生は

「とんでもない！医者はそんなことを言っているんですか。目の前の患者さんがどれだけ弱っているか、しんどいかわからないんだ。数値と画像しか診ていないから。人を診ていない」

といい、この日からお兄様は丹羽療法一本にされました。丹羽先生は、本当なら土佐清水病院に入院してもらうのがいちばんだけど、年齢が85歳で、かなり弱られているので、穏やかな余生を送れるように生薬と注射での治療にしようと。

帰り際にお兄様は、

「丹羽先生にお会いして、砂漠で水をいただいたようです」

とおっしゃいました。印象的なひとことでした。

兄の元気な姿にまるでお化けに会ったように驚いた医者

あれから３年。お兄様はいかがされているかとこちらから辻田さんに連絡してみました。

「兄はこのごろは足腰が弱ってきて出歩くことがなくなりましたね。本当ならこのインタビューも兄が直接受けられればよかったんですが。でも、まだ頭はしっかりしていますし、この間なんかウナギを食べていましたよ」

おとしはもうすぐ90歳。医者に

告げられた余命はとっくに過ぎています。というか、日本人男性の平均寿命81歳も軽く飛び越えて、普通にご長寿といえます。

丹羽先生の生薬は今も飲んでいるけれど、新横浜の診療所には行けていないとか。しかし３か月に一度、これまで通っていた病院で検査をしているそうです。

「病院で検査してもらったデータを兄の息子が新横浜に持って行って、丹羽先生に診てもらっているようです」

新横浜の診療所でお会いしたときは、ほんとうにつらそうだったお兄様。その後はどのように過ごされてきたのでしょうか。

「あの日、薬をいただき、注射もしてもらったんです。それがすごく良かったみたいで、帰りには随分と楽になったといってました。何よりも、気持ちが楽になったといってました。それだけ抗がん剤治療はつらかったんでしょう」

それからの回復具合には目を見張るものがあったといいます。

「３か月後、病院に検査に行ったら、先生がびっくりしていたそうですよ。カテーテルでの抗がん剤治療もしないで、連絡もないからてっきり亡くなったんだと思っていたそうです。ところが前よりも元気な姿で現れたものだから、お化けを見るように驚いていたと。いったい何をしてこんなに元気にと、丹羽先生の治療法に興味は持ったみたいですよ。でも、検査をしたらいわゆるマーカーの数値は減っていなかったんです」

以前から丹羽先生は、マーカーの数値は参考にはするが、それだけがすべてではない、今の医者たちは数値だけでしか判断しないからいけないんだと言っていました。お兄様の場合も丹羽先生はがんの大きさを示すマーカー値ではない数値の変化を見て、

「おお、私の薬が効いているといって喜んでいたそうですよ。僕にはそれが何なのかよくわからないのですが、兄は見る見る元気になっていました。体調がいいのか、食欲もあり、体重も増えたんです。とてもがん患者には見えませんでした」

医者はマーカーの数値が下がっていなかったことから、いまは一時的に元気になっているだけで、そのうちに坂道を下るように悪化すると思っていたようです。ところがお兄様はどんどん元気になられたとか。

「医者は、生きているのが不思議なくらいの数値なのに肌の色艶はいいし、元気だから、もうデータはとりたくないって」

おそらく担当医の頭の中は？マーカー値でいっぱいだったはず。

「がんが発覚してから５年近く。一時は大変な思いもしましたが、今は好きなものを好きなだけ食べ、ゆったりと過ごしています」

理想のクオリティオブライフを過ごされているお兄様。

丹羽先生の治療をもっと多くの人に伝えていきたい

辻田さんの世話焼きは、これだけではありませんでした。

「実は、僕の姉も２年くらい前にリウマチになって、ステロイドを使っていたから、これはいけないと言って、丹羽先生のところに連れて行ったんです。杖をつかないと歩けないくらいでした。それがね、ＳＯＤと丹羽先生の生薬で今はすっかり良くなって、元気にシャキシャキと歩いていますよ。９１歳です」

辻田さんの面倒見がいいのもありますが、やはり当のご本人が何度も生還してきたという事実があるから、説得力が違います。

「僕も含め、本当に丹羽先生に診てもらってよかったです。このことをもっとたくさんの人に教えてあげたいですよ。年取ってから手術や抗がん剤なんか、絶対に良くないってことを。僕や兄がいい見本だと思うんですよ。僕もね、丹羽療法などを広めるために、もう一度、鍼灸治療院を再開しようかと思っているんです」

さらにマラソンも走りたいとおっしゃる辻田さん。

私たちもこれからも辻田さんをレポートしていきたいと思います。

●ＳＯＤ様作用食品とは●
丹羽博士の開発

ＳＯＤとは、スーパーオキサイド・ディスムターゼの頭文字をとったもので「活性酸素」を取り除く「酵素」のことです。

最近、健康のカギを握る物質として「活性酸素」と「ＳＯＤ」の働きと役割がクローズアップされてきました。そして、活性酸素が体内に増加すると、がんや生活習慣病など、さまざまな疾病を引き起こすことが明らかになってきました。

体内に活性酸素が増えても、本来、人間や動物には余分な活性酸素を取り除くＳＯＤという酵素が存在していて、病気を防ぎ、身体の健康を守ってくれます。ところが、現代社会の弊害（公害、薬害、食品添加物の害）などが、活性酸素を暴走させていて、体内のＳＯＤだけでは追いつかなくなっています。

しかし、残念なことにＳＯＤという酵素は分子量が大きいために内服しても胃で破壊され、腸から吸収されませんでした。それを、内服できるように研究されたのが丹羽ＳＯＤ様作用食品です。

開発した丹羽靭負（耕三）医学博士は、京都大学医学部を卒業し、医学博士として数々の研究が注目を集めていたときにご子息を白血病で亡くされ、それをキッカケにＳＯＤの研究を始めました。副作用がまったくないがん治療薬、がテーマでした。開発には実に二十年もの歳月が必要でした。

「活性酸素をはじめとする免疫学の研究を通して私が知った〝自然の摂理〟は、私に大自然のメカニズムの精微さと人間の自己治癒力の偉大さを教えてくれました。〝病気は自分が治すもの〟私は、この理想を患者さんの誰もが実現できるように医師の立場から最大限の努力を続けています」

先生は今も、土佐清水病院院長として、毎日、医療の現場でがん、アトピー、膠原病などの難病に苦しむ患者さん達の治療にあたっています。また、ＳＯＤなどを始めとする論文は海外でも高い評価を得、日本のみならず海外の学会で講演をしたり、大学病院で特別講演をしたりと、多忙な日々を送っています。

幸いなことに最近、西洋医療と東洋医療などを統合した医療へと世の中の流れが向かっています。代替医療に対する関心や認識も高まり、丹羽博士が40年も前から言っていた、本当の意味での人を診る診療の時代です。

この会報は、そんな丹羽博士の志を受け、誰もが自分の力で健康でいられるように、難病で苦しむ方が少しでもなくなるようにとの願いを込めたものです。

SOD研究会からのお知らせ

いつもSOD研究会報をご覧いただきありがとうございます。
最近、特に当研究会へお問い合わせいただくことが多い内容についてお知らせ致します。
「丹羽耕三博士のSOD様食品は金の笠のシールが貼られていれば、どこも同じものなのでしょうか?」というような、ご質問をよくいただきます。
その回答としましては、金の笠（管理番号付）シールは丹羽免疫研究所で分析・検定し、エーパック・ニワ加工工場（土佐清水市）で開発当初から、厳しい品質管理のもとに伝統的な製法で造られる製品だけに貼付される信頼の証（マーク）でした。しかし、ここ数年前より丹羽先生の考えで別の工場で製造されたSOD様食品にも金の笠のシールが貼られ、販売されているものもあります。土佐清水市の工場で製造されたか、そうでないかを見比べる一つの目安が、まず金の笠シールの特徴にあります。

エーパック・ニワ加工工場（土佐清水市）で製造されている製品シールの特徴

原寸大　横 30mm、縦 25mm

- **管理番号は６桁**
  ※土佐清水で製造された証明の通し番号となっています。
- **シール左部分に絵や記号が記載されている**
  ※左部分の表示は製品管理の為、不定期に変わります。
- **他の工場で製造された製品と比べ、原末の味や色、粒の大きさが違う場合などがある**